

第 7 3 回 近畿地区大学建築系学科
卒業設計コンクール応募作品一覧

平成31年4月10日
日本建築学会近畿支部

No.	作品名	学生氏名	大学・学科	図面枚数
1	結一奈良市における図書館の設計	大橋 佑香	帝塚山大学 居住空間デザイン学科	4
2	「食べる」まち ～食堂がつながる新しい学校のカタチ～	渡邊 佳	奈良女子大学 住環境学科	6
3	多重露光	伊藤 健	京都大学 建築学科	5
4	水際の寄す処 —水路が紡ぐ福良の未来—	植田 実香	神戸大学 建築学科	7
5	動き出す建築 —子どもの遊びに着目した小学校の計画—	大杉 悟司	京都府立大学 環境デザイン学科	11
6	「ロジヤド」	池内天子 橋本脩斗 波多野愛香 森山向陽 植田隆介 田中友里	和歌山大学 環境システム学科	2
7	埋めない選択—衣類のリサイクル工場—	池田 彩花	立命館大学 建築都市デザイン学科	7
8	<u>滲む境界 ～混在的都市創出による都市更新の提案～</u>	川島 裕弘	大阪工業大学 建築学科	8
9	丘にある祖母の家	土器屋 葉子	滋賀県立大学 環境建築デザイン学科	8
10	建築参道 —または都市における建築としての境内—	田村 航一	京都工芸繊維大学 デザイン・建築学科(建築I)	7
11	Space Configuration System —人工知能(AI)の普及による建築の変化の研究と提案—	梶原 尚人	大阪産業大学 建築・環境デザイン学科	4
12	住む、働く、交わる	唐木 日菜子	京都精華大学 建築学科	6
13	メイカーズマウンテン	井坂 匠吾	大阪芸術大学 建築学科	2
14	まちでまもる —まちの課題+まちの課題でよりよいまちへ	平田 七海	武庫川女子大学 生活環境学科	10
15	<u>SteamSCAPE —地熱の街に宿る発電の場—</u>	宅野 蒼生	神戸大学 建築学科(建築デザイン)	8
16	棚田に寄り添う	鳶田 優実	大阪市立大学 建築学科	1
17	下鴨の緑緑の棲家	徳永 茉音	京都女子大学 生活造形学科	4
18	雨跡を編む	福島 広大	大阪大学 地球総合工学科	8
19	<u>Vital Base —能動的再生医療施設—</u>	影山 翼基	近畿大学 建築学科	6
20	人口減少時代における新たなニュータウンの在り方 —中学校と駅前施設の融合をとおして—	石川 采奈	滋賀県立大学 生活デザイン学科	7
21	織り成す日常 —駅に都市の緑を—	石田 美優	大阪工業大学 空間デザイン学科	6
22	Agri-Tecture —アバンギャルドの景観変化に対する農住一致型建築—	松井 俊裕	神戸芸術工科大学 環境デザイン学科	11
23	ちとぐらし、ちとせぐらし	山岡 亜実	武庫川女子大学 建築学科	9
24	家族と過ごす休日 ～豊かな自然の中で心に残る原体験を～	中安 淳平	摂南大学 建築学科	6
25	線路沿いの盛り場 あるいは 都市のスキマ空間における公共のあり方	福井 雅幸	京都工芸繊維大学 デザイン建築学課程(建築B)	8
26	おさかなみちとヒトの道	折口 真理恵	成安造形大学 芸術学科	2
27	岩石為る者	好田 一貴	関西大学 建築学科	18
28	小江環境美術館	那須 福音	京都美術工芸大学 伝統建築コース	8

(受付順) 以上28点<No. 欄に○印のものは入選作品>

日本建築学会近畿支部
平成30年度近畿地区大学建築系学科
卒業設計コンクール（第73回）審査報告

審査員長 南浦 琢磨

平成31年4月10日（水） 審査会場・大阪科学技術センター（6階600号室）

審査員長（互選） 南浦 琢磨
審査員（50音順） 臼井 明夫・岡田 泰典・坂本 昭・須賀 定邦・中村 文紀・牧野 雅一
応募作品 28点（別紙参照）

審査経緯

審査員は、設計事務所・ゼネコン設計部所属の計7名で構成され、厳正かつ公平に審査を行い、応募27作品から入選3点を選出した。力作も多く、選出は3次審査まで及んだ。本年は、環境問題や災害対策、エネルギー、医療問題など社会的課題に対するテーマからが多く、社会背景に対する学生の強いメッセージを感じた作品が多かったことが大きな印象であった。

1次審査として、審査員各自が全作品を審査し、各自6作品までの優秀案を選出した。集計の結果、満票を獲得した作品はなく、6票を獲得した作品が1点、5票を獲得した作品が1点、4票を獲得した作品が1点、3票を獲得した作品が3点、2票を獲得した作品が5点、1票を獲得した作品が4点という結果で、この時点で0票のもの落選とした。

2次審査として、1、2票獲得作品（合計9作品）について落選とするかを審査員が作品の前に集まり議論するスタイルで審査を進めた。これらに表を投じた審査委員が他の審査員に選出理由を説明し、全員で審議した。その結果、2票獲得のうちの1作品は、計画背景の奥深さ・ダイナミックで独特なデザインを全員で改めて評価し、これを3次審査へ進めることとした。

3次審査では、2次審査で繰り上げた1作品と、1次審査で3～6票獲得した6作品を囲み、審査員が作品1点ずつ全作品紙面を会場に広げ確認した。それぞれの作品に対し、得票した審査員から強く評価した部分を説明し、そのうえで6作品から各審査員3票までの投票とした選出を行った。この投票は、6票を獲得した作品が1点、5票を獲得した作品が1点、3票を獲得した作品が1点であった。残りの3作品はそれぞれ1票のみの得票であった。その結果、入選作品は3次審査で3票以上獲得したNo. 19、No. 15、No. 8を選定した。

入選作品は、建築デザイン・造形・プレゼンテーションのみならず、社会背景をとらえたストーリー性や課題に対する意識がしっかりと表現できた総合力の高い作品であった。その他の作品においてもそれぞれの個性がしっかりと表現できているものも多くあったが、総合力という点で入選に至らなかった。今回の全応募作者が、学生の中に培った設計力を社会で十分に発揮する近い将来に、大きな期待を感じることができたコンクールであった。

（南浦）

審査概評

今年度の応募作品は全 28 作品。
総合的に完成度の高い作品から、
発想力、表現力、分析力等々、作品によって秀でたものがあり、
また題材選定自体に意外性をもった作品もありと、
バラエティに富んだ作品群であった。

審査にあたり、課題や計画地の設定、調査、検討を重ねての回答の導き、
そしてそこに設計者としての思い入れがどこまで感じられるか、
を念頭に審査に臨んだ。

票が伸びなかった作品は、
いくつかの課題は立てたもののそこへの答えを出しきれていないもの、
答えとしての根拠が弱いものが目立つ。

また、プラン、提案としてよくまとまっており、
ともすればそのまま実現できそうな作品も候補に挙がったが、
卒業設計として、もうひとつ踏み込んだ「驚き」や「広がり」が望まれた。

入選三点への個評は別記に委ねるが、
・入念な調査とヒアリングに基づく根拠のある建物構成
・その上で新しい試みに挑む積極性
・説得力のあるストーリー組み
それぞれを兼ね備え、そこに秀でた 3 作品が選ばれている。

残念ながら選外となった作品にもそれぞれ光るものがあり、
審査する側もよい刺激をうけた審査会であった。

(臼井)

滲む境界 ～混在的都市創出による都市更新の提案～

川島 裕弘君 (大阪工業大学)

南大阪の堺という場所に混在的都市創出を行うという壮大な提案である。

敷地において道を挟んで存在する住居地域と工業地域の用途的分断状態を、それぞれの地域に「学ぶ、遊ぶ」などの新たなプログラムを挿入することによって、物理的境界を無くそうと試み、さらに外国人労働者を受け入れることで人的境界も無くし、様々な人々が「暮らしながら働く場」を創出している。

現実的にこれらの所作のみで、作者の意図する「暮らしながら働く場」が、都市を更新できるとは思えないが、一見バラックのような建築造形、平面・断面的にあらゆる部屋が境界なしに連続し積み重なる計画、現存する工場内に見かけるモビリティへの機能付加等、そこに表現されている建築空間全体のインパクトが、混在的都市創出の想像を掻き立てているのは間違いないだろう。勢いのある力作である。

(牧野)

SteamSCAPE 一地熱の街に宿る発電の場一

宅野 蒼生君 (神戸大学)

卒業制作として総合的に密度高く計画され、やりたかったことがしっかりと表現されている点を特に評価した。都市のインフラを支える施設は、これまで常にバックヤード的であったが、宅野さんが「分散型の社会」の到来と指摘するように電気の生産という面では、山肌にべったり張り付く太陽光パネルや林立する海岸の風車など今や、善きにつけ悪しきにつけ生活のすぐ近くにあることに改めて気づかされる。この作品は、そういったインフラと人間が寄り添った風景のひとつとして大いにリアリティを感じさせるものである。地熱発電の蒸気、電気、温水というエネルギー変換の流れが巧みに建築化され、織り込まれていく様々な機能や環境装置についても納得できるものである。既成の街との関係性にも配慮している。山間の緑量豊かな自然を背景に、人間よりもインフラ側に重心のあるメカニカルな造形や空間構成がますます加速する超高齢化社会にどうかとの見方もあるが、この地においては屹立すべきとの主張であると解した。

(中村)

Vital Base 一能動的再生医療施設一

影山 巽基君 (近畿大学)

本提案は、再生医療施設における患者の身体的・精神的視点に立った、緻密に計画された病院建築である。造血幹細胞移植経験者に療養中の精神状態とその後について膨大なヒアリングを行い、その結果から患者の不安と安心の要因を導出し、調査で得られた患者のセンシビリティを基に設計されたものである。

無菌室は、患者の行為・活動に応じた場や空間を放射状に配置し、シーンに変化のある心地良い療養空間を実現している。また、個室外の共用空間の設計では、点滴スタンドを持った状態での患者のあらゆる行動の分析から、吹抜けや段差などで全体を繋ぎながらも緩やかに行動範囲を制御している。敷地内は人や自然の気配を感じられ、公園を散歩しているような心地よさを持つ安全な回遊空間を実現している。

病院内にはアトリエやレストラン、美容室、カフェなど供給の場(ワークプレイス)となる患者が運営に携われる場を設け、公共空間を通じて社会生活の気配を取り込みつつ実社会復帰の場を実現している。

最後に、患者視点だけではなく、医療従事者、家族も含め病院という施設に関わる各々のアクターにとって細やかな建築的操作と公共空間が提起されていることから、本提案は再生医療施設の区分に留まらず、他の病院にも大いに転用できる可能性をもっていることを示している。真の意味での心身の健康を目指した新たな病院建築のあり方を提案しているといえるだろう。

(坂本)